
たった今、現代医学が敗北しました

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつた今、現代医学が敗北しました

【Nコード】

N7298X

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

Wii版バイオハザードのギャグパロです。各キャラの人間性はオリジナルとは異なり、完全に崩壊しております。御読みになられる際は正装（もしくは全裸）で御読みてください。より一層御楽しみいただけます。

序章

ラクーン市警に所属している特殊部隊・通称『S・T・A・R・S』^①

ブラヴォーチームを乗せた捜索用ヘリが消息を絶つ

その事実が同市警のスポークスマンによって明らかになった

ラクーン市警の発表によると、昨夜、S・T・A・R・Sの同チームは遭難者が相次ぐアークレイ山地・ラクーンフォレストの現地調査に出動した

が、本日未明の通信を最後に……連絡が途絶えたこの事

2

同市警では何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高いとして、目撃者の証言を求めるとともに、今夕にもS・T・A・R・S・アルファチームを捜索に投入する方針となった

ラクーン郊外では近年、猟奇殺人事件が多発し話題になっていたが、今回の事件で一層住民の不安を招くことになった

連絡が途絶えたS・T・A・R・S・ブラヴォーチームの捜索に赴いたクリス等隊員達は、怪犬の群れに襲われ、洋館に逃げ込む

だがそこは……幾多のモンスターを生み出し、事件の原因を作った恐怖の研究所をカモフラージュするための館だった

館に閉じ込められたS・T・A・R・S・メンバーのクリ
スとジル達は、脱出口を求めて彷徨ううちに、事件の真相を知ることとなる……

> i 3 3 2 2 0 — 3 9 6 1 <

本作品には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれます。

本作品に登場する人物・団体・クリーチャー等は実在のモノとは異なります。

本作品に使用される挿絵はプライバシー保護のため加工されています。

尚、作品内容を声に出して読む事はおすすめしません。御両親が泣きます。

墜ちないへりは、ただのへりだ

私の名は『アルバート・ウエスカー』。特殊部隊『S・T・A・R・S』のリーダー。実年齢よりずっと若く見えると、近所の奥様方からよく言われるナイスガイだ。チャームポイントは金髪のオイルバックと、愛用の黒のサングラス。今、私は非常に困惑している。何故なら……さっきまで私達が乗っていたへりが墜落し、目の前で派手に炎上しているからだ。運良く我々は大したケガもなく大破したへりから脱出できたのだが、これに関しては完全に予定外だった。当初の予定としては、私がへりに施した細工で突然の故障に見せかけ、山中に不時着させる手筈だった。が、神様のイタズラというか……悪魔の慈善事業というか……私の部下の一人、つまり、S・T・A・R・S・メンバーの一人が飛行中のへりの中で、いきなりオートマチックを発砲しやがったのだ。放たれた9ミリ弾はコントロールパネルに命中し、へりは完全に制御不能。なんとか当初の目的ポイント付近には降りられたが、危うく全滅するところだった。で、今からこの事態を引き起こした張本人に発砲した理由を聴こうと思う。

「おい、ジル……」

パアアアアアアア

ン！

「うわおッ!？」

その人物の名を呼びながら肩に手を置いたら、振り向きざまに撃つてきやがった。私は華麗にブリッジして回避したが、一体、何のもりだ!？

「ああ、なんだ……ウエスカーか」

その女はそう言って辺りをしきりにキョロキョロしている。完全に落ち着きを失ったその様子から、よほどの事がへりの中で起きた

山中で野郎の尻を狙撃する敵国ってナニ？

「静かにしろ、クリス。まずは周辺に散乱した装備と物資を回収するんだ。その後、ここから北東2キロの地点にある洋館へと向かうぞッ！」

「わ、分かった。すぐに準備する！ おく、ヒリヒリしやがるううう……」

そう言っただけの状態をなんとか鏡で見ようと、体をひねってマヌケにクネクネしている男

『クリス・レッドフィールド』 25歳。血液型・O型。身長181センチ。体重80.5キロ。チームで？1の射撃技術を持つ実力者。元空軍パイロットで、アルファチームのヘリ操縦も務める。観察力、洞察力に優れ、実戦経験も豊富。臆する事を知らぬ精神力と、鋼の肉体を兼ね備えているが……

「げッ！ ウエスカー、マジでヤバイ！ さっきの狙撃でオレの尻が割れちゃった！」

「……クリス、尻はみんな割れている」

「な、何だってエエエ！？ それじゃあ、みんなも既に尻を狙撃されたってワケか！？」

彼に悪気は無い。単に知能が他の人より極めて残念なだけなんだ。そう……彼には悪気も罪も無いのだ。

「ちよっと、ウエスカー」

「何だ、ジル？」

「ここから北東2キロに洋館があるって……どうしてそんなコトまで分かるのよ？」

しまった。私としたことが、ストーリーを進める事に気を取られて、とんだ失言をしてしまった。このままでは、この私が実はこの事件の黒幕の一人であるコトがバレてしまう。何とか騙し通さねばならない。そして、私はひらめいた。

「私のサングラスは特注だ。不可能は無い」

「なるほど。さすがだわ、ウエスカー」

自分で言うのもなんだが、今の適当過ぎる切り返して納得すんなよ。この女、クリスに負けず劣らずのバカかもしれない。

(……………ん?)

急いで装備と物資を掻き集めていると、大木の陰に隠れるようにして立ち尽くしているオッサンを発見。私は一応声をかけてやる。

「おい、バリー。そこで何をしている？ もうすぐ出発するぞ」

オッサンは私に声をかけられ、一瞬、ビクッと全身を震わせた。で、何者かから狙われている被害者みたいに、辺りをキョロキョロと憔悴した面持ちで見渡している。

「お、俺は行かないツ。冗談じゃない……夜中にこんな山中を進むなんて、マツ DXの前でパンツを脱ぐようなもんだツ！」

例えの意味はよく分からないが、彼は完全に怯えきっていた。

『バリー・バートン』 38歳。血液型・A型。身長186センチ。体重89・3キロ。元SWAT。火器関係の知識が豊富で、隊内での火器の整備・補充を担当。モイラとポリーという二人の娘がおり、家族を大切にしている。けれど……

バサバサバサバサツ

！

「ふぎやああああああああああああああああああああああ
ツツツ……」

バリー、絶叫。

「落ち着け！ 野鳥が羽ばたいたただけだ！」

オッサンは極度のビビリだった。カツと両目を見開き、口をアングリと全開にし、その場に力無くへたれこむ始末だ。

「よし、全員出発するぞ！」

真夜中の行進が始まった。これから先、我々の身にどのような怪現象や敵やトラップが待ち受けているか……私だけが知っている。

さつきも言った通り、私は黒幕の一人。今回はS・T・A・R・S・のメンバーを使って、アンブレラ社が開発したB・O・W・(生物兵器)と一定の環境下で戦わせ、その実戦データを記録するのが主な目的だ。そこから得られたデータはB・O・W・の更なる性能向

上につながり、アンブレラ社は“次なる段階”へと発展できるだろう。

> i333221—3961<

『アンブレラ社』 アメリカでの家庭用薬品シェア90%を誇る、全米?1の巨大複合企業であり、その裏の姿は、細菌兵器や生物兵器を開発する死の商人。

今回は、アンブレラ社が管轄する地下研究施設の一つに事故が発生し、施設及び、偽装のために建てられた洋館までもがウイルスに汚染された。で、アンブレラの上層部から私に指示が下ったワケだが………私には上層部の思惑とは別に目的がある。研究施設の最深部に保管されている、オリジナルの『T-ウィルス』を首尾良く奪取し、アンブレラのライバル企業への手土産とするのだ。今回得られるであろう貴重な実戦データとともに。

(ただ、問題は……)

私は隊列の先頭に立ち、チラツと後ろを振り返る。

「なあ、ジル。署内の連中がオレのこと見ながら、“ゴリラだゴリラ”って指差して言うんだけどさあ、どうしてだ？」

「脳筋でマツチョで、デスクの引き出しに常にバナナを常備してるからよ」

バナナ片手に歩くクリス。おい……拳銃はどうした？

ロケラン担いで歩くジル。おい……いきなりソレはねえよ。

「やっぱ危ねえよ、ウェスカー！ 蚊に刺されてかゆくなつたトコをかいて、そこからバイ菌が入ったり、野犬の遠吠えでビックリしてショック死するかもしれんッ！ なあ、引き返して救援を待とうッ！」

文句ばつかたれるバリー。おい……娘の写真を握り締めて泣くな。

(まあ、いい。洋館に着きさえすればどうにでもなる)

そう思いながら我々は行進を続ける。

私はアルバート・ウエスカ！。
果たして、何人が明日の朝日を浴びられるだろうか。あるいは

こういうヤツは大抵、次のシーンで死ぬ

やあ、みんな。私の名はアルバート・ウエスカー。前回のエピソードを読んでくれた人達は知っていると思うが、私は今、数名の部下を引き連れて真夜中の山中を行進している最中だ。クリス、ジルバリー……三名とも非常に有能な部下で、どれだけ有能なのかRP G風に説明すると、ラスボスの魔王相手に竹やり装備して突っ込んでいく勇者ぐらい有能である。

「なあ、ウエスカー……今、獣の唸り声みたいなのが聞こえなかったか？」

私の隣でショットガンを構え、しきりに周囲を警戒している男が小声で呼びかけてきた。彼の名は『ジヨセフ・フロスト』 27歳。血液型・B型。身長179センチ。体重72.3キロ。チームの整備技師。危険物取扱いなどの資格を持ち、車軸整備を担当。血の気が多く暴走気味な性格で、緊急時の行動には不安がある。ちなみに……もうすぐ死ぬ予定。何故なら、さつきから死亡フラグの乱立が止まらないから。B級ホラー映画で最初に死ぬ名も無い出演者と同様の空気をもし出しているし。銃を構えて周囲を警戒する仕草が全体的に小物っぽい。こういう輩は、見ている人達に最初のインパクトを与えるためだけに大概が犠牲になる。本人は悪くないが、犠牲になる。

<ん？ 何だ？ 何かいるのか？> <武器を構えてオロオロ
> <な、何だ……気のせいかな……> <うわあああああああああああッ！！>

レギュラーキャラになれないヤツは、上記のような単純な流れで事務作業のごとく片付けられる。悲しいが、それが自然の摂理であり、それがゲームのプロデューサーの意向である。

ジョセフの喉元にガブリと食いついている。同時に、次々と別のゾンビ犬が草むらの中から跳びかかってきて、倒れているジョセフの腕や脚に食らいついていった。

(……………んん?)

ウェスカーが小さく首を傾げる。何だか……様子がおかしい。食らいついてはいるが、ジョセフからは特に出血している様子も、肉を食い千切られている様子もうかがえない。まるで、与えられたオモチャと戯れているみたいだ。

「わんわんおツ、久しぶりの獲物だおツ！ ゆっくり遊んでいくんだおツ」

ゾンビ犬なのに、妙に無邪気な笑顔だ。肉体の所々が腐敗し、片目なんか飛び出しちゃってるのもいるんだが、連中は教育番組のアニメキャラみたいな声でしゃべって、とっても楽しそうにじゃれている。

「ジョセフ！ 今、助けてあげるわツ！」

「待て、撃つんじゃない！ あれだけ密着した状態ではジョセフにも当たってしまう！」

オートマチックを構えて今にも引き金を引きそうになっていたジルを制し、私は冷静に観察することにした。

(おかしい……ヤツ等はもっと凶暴で、人など容易に噛み殺してしまっただけなんだが……もしか、野生化して何だかの突然変異でも起こしたのか!?)

キラ〜〜ン

考えのまとまったウェスカーのサングラスが煌めく。

キラ〜〜ン

ジルが手にするオートマチックの銃口が、月明かりに照らされて一緒に煌めく。つまり

パアアアアアアアア

ン！

「ウエスカー……俺の事は気にせず先に行ってくれ。ケツが痛すぎてまともに歩けそうもない……」

ジョセフの表情がとつても微妙。ゾンビ犬に食い殺されそうな光景にみまわれながら、結局、味方から尻を銃撃されてリタイヤ。

「安心しろ、ジョセフ。後で救助隊のへりに連絡しておく。ボラノール持参で急げとな」

私はそう言つてサングラスを不敵に光らせた。

「ああ、軟膏タイプで……よ、よろしく……ぐふっ……」
ジョセフ、果てる。

「おい、バリー！　いつまで木陰に隠れている。走るぞッ！」

少し離れた所で、大木の陰から顔面を半分だけのぞかせてこつちをうかがうバリー……仲間を助ける気はハナっから無し。

「すまん、ウエスカー……俺もここでリタイヤだ」

バリーの額が大量の脂汗で濡れている。そして、股間も濡れている。

「ま、まさか……40前のオッサンがか!？」

バリー、家で帰りを待つ妻と二人の愛娘に何て言う気だ？　病気もケガも無かったが、失禁はしてしまった……そう告白する気なのか？

(まさか、ここまでヘタレだったとは……私の考えが甘かった)

私は気まずい気持ちを胸にしまいながら、ゆっくりと踵を返した。さようなら、バリー。オマエも立派なメンバーだった。

パンッ!

「うわおッ!？」

バリー、木陰から跳び出す。いきなりジルに発砲されたから。

「全速力で走れよ。早く乾くかもよ」

このアマ、すべからず暴力で解決しようとしやがる。

と、いうワケで、私達はささやかな月明かりを全身に浴びながら、呼吸を荒げ、鬱蒼とした山中を駆け抜けていく。そして、数

分後……到着した。

「こ、コレが……その洋館なのか？」

クリスが呆けた声で建物を見上げる。

「何か……禍々しい空気が漏れているわ」

目を細めて警戒するジル。

（さて、諸君。ここからが本番だ。しっかりと戦闘データを記録させてもらうぞ）

口元をわずかに歪めて微笑む私、ウエスカー。生か死か　この館の中で待ち受けているのは

「……………あ、ホントに乾いてる」

バリー、空気読め。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7298x/>

たった今、現代医学が敗北しました

2011年10月21日07時01分発行